

異世界転生令嬢、  
出奔する4

# 登場人物紹介

CHARACTER

## シャローン

『紅蓮』のメンバーであるハーフェルフ。弓使い。

## リザ

女性だけの冒険者グループ『紅蓮』のリーダー。大剣使い。

## ネロ

『紅蓮』のメンバーである黒猫の獣人。鉤爪使い。

## リリアーナ

今回の依頼人である大商会の娘。とある理由で男性恐怖症。

## エド

奴隷商から逃げてきた黒狼の獣人。現在はナギと同じく冒険者。馬のように大きな狼の姿、ボメラニアンのような仔狼の姿にもなる。

## ナギ

『アリア』という辺境伯令嬢に転生した元OL、現冒険者。前世の記憶を思い出し、チートスキルを手に入れた。美味しいご飯をこよなく愛している。

## アキラ

ナギの後輩でありエドの前世である魂。仔狼の姿の際にアキラの意識に切り替わることが多い。第三者にはナギの従魔と紹介している。

## 第一章 あれから、三年

ダンジョン都市、東のギルドには年若い冒険者が多く所属している。

東西南北、四つからなるダンジョンの中でも、通称『東の肉ダンジョン』は低階層でルーキーが稼ぎやすいからだ。一階層に出現する魔物はホーンラビット、ラージマウス、コッコ鳥と見習い冒険者でも倒せる弱い魔獣ばかりだった。

ダンジョン都市の食料——特に肉類はほぼ東のダンジョン内でのドロップ品で賄<sup>まかな</sup>われている。

万単位の住民の腹を満たすために、東の冒険者ギルドは魔獣肉の買い取りに力を入れていた。弱い魔獣の肉は買い取り額もそれほど高くはないが、低レベル冒険者でも狩るのは容易<sup>たやす</sup>い。

突出した攻撃用のスキルや魔法がないルーキーでも真面目に東のダンジョンに籠<sup>こ</sup>もれば、三日は余裕で暮らせるほどに稼げるのだ。

そんなわけで、他のギルドと比べてもルーキーが目立つ東のダンジョンだったが、その中でもひときわ目を引く二人がいた。

漆黒の髪と琥珀色の瞳をした黒狼族の獣人の少年と、見事な金髪と空色の瞳の少女とのコンビだ。どちらも整った顔立ちをしており、ガラの悪い冒険者崩れに絡まれそうな二人だったが、冒険者

ギルドに所属して三年、元気に活躍している。

不埒な連中は黒狼獣人の少年がこっそり排除しているらしい。特に、相棒である金髪の愛らしい少女に触れようとした輩は徹底的にぶちのめしていると噂だった。

その苛烈さには、さすが『戦闘狂ウサギ』の弟子だと、ギルド中が恐れ慄いた。

ちなみに少女の方も自分や連れの少年に悪意が向けられると、きっちり報復はしている。

多少過剰なところがあるかもしれないが、まあ自衛の範囲内でしょう、と東の冒険者ギルドのサブマスター、フェローが涼しい顔で断言するので、特に問題になったことはない。

愛らしい容貌の少女は器用に魔法を操って、自分たちに絡む連中を絶妙な按配で撃退した。ちゃんと自分たちが被害者の立場でいられるように根回しをした上で、だ。

成人前の少女にあつまり倒された連中は復讐を誓う前に、大抵が誰かから親切に教えてもらえた。あの子は『暴虐のエルフ』の愛弟子だよ、と。

耳元で囁かれた連中は尻尾を巻いて逃げ出すので、東地区の治安に地味に貢献していた。

「リアさん、こんにちは。依頼の品を十階層で手に入れてきました」

期待の若手冒険者のうち、ポーターを兼任している少女、ナギが受付カウンターに現れた。やわらかな金色の髪は背中半ばまで伸びており、綺麗に結われている。背後にひっそりと立つ黒衣の少年は、その相棒のエドだ。ぴんと立った獣耳と尻尾から、彼が黒狼族の獣人だと分かる。

「まあ、さすがナギさん！ ドロップ率がかなり低いレアな素材なのに。見事ですな！」

「運が良かったみたいです」

東の冒険者ギルドのベテラン受付嬢、犬獣人のリアは興奮で尻尾が揺れた。

カウンターに依頼の品を持参してきた二人組の手にあるのは、ゴブリンキングの錫杖なのだ。

東のダンジョン十階層のボス、ゴブリンキングは中堅冒険者グループなら倒せる魔物ではあるが、そのドロップ率は低い。黄金の王冠と錫杖を持ち、ゴブリンを召喚するキングのドロップアイテムは魔石と錫杖、王冠のいずれかだが、大抵は魔石だけドロップする。

錫杖と王冠は滅多にドロップしないレアなお宝だ。とある冒険者グループが百回近く十階層のボスに挑戦し、ようやく錫杖を手に入れることができたという記録がかるうじて残っている。

百分の一の確率のレアドロップを求めるよりも、下の階層に潜った方が効率よく稼げるため、今では挑戦する冒険者もいない。そんなお宝の、錫杖だった。

「召喚魔法の能力を底上げするゴブリンキングの錫杖！ なかなか市場に出回らなかったのに、依頼主の方も喜ばれますよ」

「役に立てたなら嬉しいです。ほんと、今日はラッキーだったね、エド」

「……そうだな。ナギは運がいい」

にこりと快活に笑う少女を、無口な少年は眩しそうに見つめている。

リアはそんな二人を微笑ましく眺めながらも、すばやく換金手続きを取った。

『ゴブリンキングの錫杖求む』の依頼書にポン、と達成の判を押して、依頼主から預かっていた報奨金を渡す。金貨十五枚、適正価格だ。皮袋の中身を確認すると、二人は笑顔で受け取った。

ナギが手にした報酬はリアの目の前ではつと消える。彼女のスキルである【アイテムボックス】に収納したのだ。

三年前に彼らがこのカウンターで冒険者になりたいとやってきた時のことを、リアは昨日のことのように思い出せる。それほど印象深かったのだ。

対応したのは、今はサブマスターに昇進したフェロー。当時は事務方の主任だった。

二人とも成人年齢どころか、十歳になったばかりの子供で。訳ありなのはすぐに分かったが、特に追及はしないのが暗黙の了解。犯罪者ではなく、レベルも規定に達しているならば、冒険者ギルドへの加入は自由なのだ。

幸い少年は規定レベルを超えていたので、加入できた。少女のほうはレベルが足りなかったが、ポーターとして見習い冒険者を希望していたので、少年とのコンビ限定で活動を認められた。

期待の新人だよ、とフェローは冗談めかして笑っていたが、実際その通りとなった。

「今じゃ、二人とも立派な銅級の冒険者だものね」

「はい！ この前見習い冒険者から昇格して、銅のタグをもらえました」

ナギが嬉しそうにギルドのドッグタグを取り出した。チェーンネックレスに通して持ち歩いているようだ。誇らしげに掲げている少女の笑顔が眩しくて、リアは微笑ましく見守った。

冒険者ランクはレベルと実績、ギルドへの貢献度によって昇格する。

なりたてのルーキーは木製のタグ。昇格すると、鉄級——鉄製のタグが貰えるのだ。

さらに、銅、銀、金の順にランクアップする。

もつともほとんどの冒険者が銅級に甘んじているのが現状だった。

「成人前の子が銅級になるのは、なかなか優秀よ？ この調子で銀級を目指してね」

「はい、がんばります！」

こくりとエドも頷く。昔からランクアップについてはどちらかと言えば、この少年のほうが乗り気なことをリアは知っていた。二人を眺めていると、つい三年前のことを思い出してしまう。

（そういえば、初めて冒険者ギルドを訪れた時、ナギは男装していたのよね。懐かしいわ）

あんなに愛らしい顔をしているのに、どうして男の子の服を着ているのだろう。もったいない、としみじみ思っていた。鼻のきく犬族の獣人で、しかも同じ女性なのだ。リアはナギの性別にすぐに気付いた。だけど、何か理由があるのだろうと考えて、ずっと口を噤んでいたのである。

育ちの良さそうな所作から、それなりの生まれ育ちなのは分かっていた。そういった子供たちが家の事情で冒険者を目指すことは、べつに珍しくもなんともない。

二人とも遠くからダンジョン都市を目指して旅をしてきたと言っていたし、自衛のために男装をしていたのだろう。残念ながら、年若い少女が危ない目に遭うことは多い。

（あんなに綺麗な子だもの、自衛が必要なのは当然だわ）

あれから三年。十歳だった少女は十三歳に成長した。いつからか、ナギは男装をやめていた。

肩口のあたりで切り揃えられていた髪も、今では背中を覆う長さまで伸びている。

少年の服を脱ぎ捨てたナギが可愛らしい女の子の服を堂々と身に纏うようになって——そこでようやく彼女の性別に気付いた連中の驚愕の表情を思い出して、リアはくすりと笑った。



ある程度の年齢の女性や獣人の冒険者たちはほぼ気付いていたが、人族の男性は鈍感だ。

ナギは十歳の頃から可愛かったが、十三歳となった今、すらりと四肢が伸びて、それは魅力的な少女へと成長していた。

成人前後のルーキーたちは目の色を変えて少女に群がろうとしたが、相棒の少年に容赦なく排除された。彼らの師匠たちも悪い虫の撃退をこっそり手伝っていたようだが、受付嬢は知らないふりを通している。リアだって、ずっと見守っていた少女のことを妹のように可愛がっていたので。

「あ、これはギルドへの差し入れです。皆さんどうぞ」

「まあ。いつもありがとう、ナギさん」

リアを筆頭にサブマスターとなったフェロー、主任のガルゴ。受付嬢から一般職員まで、ナギが差し入れてくれる菓子の大ファンなのだ。

きらっきらの愛らしい笑顔で手を振る少女に見惚れたルーキーがふらふら寄っていかうとするのを、太い腕ががっしり首根っこを掴んで引き止めている。ナギ特製の蜂蜜菓子里にすっかり懐柔されているクマ獣人のガルゴだ。ギルド裏でしつかり『教育』をしてくれるのだろう。

不埒な気配に気付いていた少女の相棒がそっと目礼している。オオカミの尾を踏むバカは未然に防がれたようだ。中堅冒険者たちはいつものことだと苦笑交じりに見守ってくれている。

本日も、東の冒険者ギルドは平和だった。

\* \* \*

「ナギちゃん！ 新米が入荷しているよ！」

「あら、エド。ちよつとこつちでバイトして行かないかい？」

冒険者ギルドからの帰り道。市場を冷やかしている、賑やかな声に呼び止められる。

慣れたもので、二人はそれぞれ呼び止めてくれた屋台へと向かった。

ナギを呼び止めたのは、穀物を扱う商人だ。目利きの腕が良く、良心的な商売をしているため、ナギはお得意さんとして通っている。

ダンジョン都市に流通しているタイ米風の細長い米ではなく、もっちりとした米を好むナギのために、似た米を探し出してくれた恩人だ。

ほぼ日本米に近い味と食感の米に出会えた際に、ナギとアキラが嬉し泣きしたのは言うまでもない。当然、在庫をあるだけ買い占めたし、次回出店時の購入予約もしてある。

特別な米作りには苦労したようで、価格は他の米よりも高かったが、ナギは言い値で購入した。

「新米……！ 炊き立てご飯で焼き肉を堪能するのもいいけど、シンプルに塩にぎりも美味しいよね。卵かけご飯はもちろん、サンマの塩焼きも食べたいし、おかずに悩むわ……！」

身悶えしながらも、店頭に並ぶ新米はすべて購入した。金貨を差し出す手に迷いはない。ずっしりと重い米袋をナギは【無限収納EX】に収納する。

収納スキル持ちなことは市場でも知れ渡っているので、気にせずに買い物を楽しんだ。

「まいどあり！」

穀物商人のおじさんに手を振って、エドを探す。先ほど彼に声を掛けていたのは、牛乳屋だ。牧場の女将さんと、エドを見掛けると氷魔法でのバイトを頼んでくる女傑である。

「あ、いたわね」

牛乳屋の屋台を見つけて、のんびりと足を向ける。

大樽いっぱいの水を作らされた駄賃なのだろう。エドがフルーツ牛乳を飲んでいた。

「こんにちは。美味しそうですね、それ」

「いらつしやい、ナギちゃん。アンタも飲んでいきな。ほら！」

「ありがとうございます。バナナ味ですね。いい香り」

手渡された木製カップの中身は牛乳とバナナを魔法具のミキサで加工したフルーツ牛乳だ。

いちばん人気がこのバナナ味。こっそり生活魔法で中身を冷やして、美味しく飲み干した。

「フルーツ牛乳の種類、あれからまた増えたんですね」

「そうなんだよ。ナギちゃんのレシピを参考にして作ったのが、このマンゴー味！ パインとオレンジ、桃も人気があるけど、甘みが強いバナナやマンゴーがやっぱり強いねえ」

「どれも美味しいのに。でも、マンゴー味は女の子が好きそう」

「でしょ？ これはイケると思ったのよ！」

フルーツ牛乳のアイデアは、ナギがこっそり教えてあげたのだ。いつも牛乳や乳製品をおまけしてくれる女将が、屋台ではあまり売れないのだと落ち込んでいたため、それとなく提案した。

ちょうどドワーフ工房のミヤが作ってくれた魔法具のミキサの大量生産が可能になった頃で、

手に入りやすくなっていたのもある。

ナギのアイデアに勝機を見出した牛乳屋の女将とお隣の果樹園オーナーが手を組んで、フルーツ牛乳の屋台を始めたのだが、これが当たり。今では、市場の大人気商品だ。

「フルーツ牛乳ついでに他の乳製品も売れるようになったのよ。ナギちゃんとエドには感謝だよ！」

「俺も氷魔法の練習になるし、バイト代ももらえるから、感謝している」

「ありがとねえ。二人とも本当にいい子だよ。ほら、チーズとヨーグルトも持っておいき。すぐに食べなきゃダメなやつで悪いけど」

「大丈夫です。私たちが育ち盛りなので！ ありがとうございます」

につこり笑って、乳製品をゲット。すかさず収納する。マジックバッグと違って、ナギの【無限収納EX】スキルは収納した物の時間を止めることができるので、問題ない。

元日本人の彼女が『アリア』として転生し、虐待していた実家から出奔して、冒険者になった。あれから、三年。あつという間だったな、とあらためて思う。

ナギは十三歳になった。あと二年で成人だが、我ながら変わりようがすごい。さすが成長期。だが、エドの成長ぶりには敵わない。

（身長がすぐ伸びたのよね……。しかも、二の腕や肩のあたりの筋肉も育ったし）

ナギの目からしたら、もう立派な大人だ。年若く見えがちなアジア人からは、西洋人は大人びて見えるものだが、それにしても十三歳には見えない外見だった。

（私も十センチは身長が伸びたはずなのに、エドの隣じゃ全然目立たない……）

身長百六十センチ。この世界では小柄だったナギも成長したのだ。

痩せこけていた『アリア』からは想像がつかないほどに、健康的に育ったと思う。

冒険者になって、しっかり運動をして、お腹いっぱい食べて、よく眠った成果であろう。

（眠る前に【治癒魔法】の習慣は続けているから、お肌はすべすべで髪もさらさらよ！）

覚悟を持って切り落とした髪も、今では背中が隠れるほどの長さを誇っている。

成長していく中で、肉体の変化もあり、いつまでも男装で隠し通すことは無理だと判断したナギは、ある日ワンピース姿でギルドを訪れてみたのだ。

物凄く緊張したが、意外とあっさりと受け入れてもらえた。

（獣人族の冒険者さんたちや、勘のいいお姉さま方にはバレていたみたいね。それにしても、皆は気にしなすぎ！ 気付いていたなら、突っ込んでくれたらいいのに）

自分たちが考えるほど、他人はそこまで人に興味を持たないのだと知った。

三年間、王国からの追手らしき気配をまったく感じなかったのも、男装を止めた理由のひとつだ。週休二日でダンジョンに挑み、積極的に魔獣や魔物を狩り、ナギのレベルは七十を超えた。

エドなどはレベル八十六だ。レベルだけでいえば、銀級シルバーでもおかしくない。

一般的な銅級冒険者の平均レベルが五十と聞いたことがあるので、転生者特典があるとはいえ、自画自賛してもいいと思う。二人とも、頑張った！

そこまで己を鍛え上げて、ようやくナギは心の鎧をひとつ脱ぎ捨てることができたのだ。

名前はそのまま、ただのナギ。銅級銅バレーンクの冒険者で、趣味は料理。美味おいしい食べ物に目がない。魔

法が得意で、ドロップ運のいい冒険者として、これからもダンジョン都市で生きていく。

こそこそと隠れず、胸を張って生きていこうと、エドと二人であらためて誓った。

それに、もしも追手が現れたとしても、隠れてやり過ごすスキルはあるのだ。

（いざとなったら屋敷を【無限収納EX】に収納して、ダンジョンが大森林に逃げ込もう。数年ほど雲隠れすれば逃げ切れるだろうって、エドも言ってくれたし）

それは、とても心強い提案だった。ダンジョンはともかく大森林については、自殺願望でもあるのか、と正気を疑われそうな逃亡先だが、二人ともその暮らしを満喫できる自信がある。

自由に生きることを決めてから、ナギはこれまで以上にせつせと備蓄を【無限収納EX】内に溜め込んでいた。肉は魔獣を狩ればいい。果物は森で採取できる。必要なのは、調味料と穀物類。そして、新鮮な野菜だ。もちろん、卵と牛乳、乳製品もたくさん備えておくべきだが。

収納物に時間経過がない収納スキルのおかげで、大量の備蓄も余裕で管理できる。

暇さえあれば市場や商店で買い溜めしていたおかげで、二人が二年以上食い繋げるくらいの食糧を【無限収納EX】内に確保できていた。

（塩は海で大量に作ったし、蜂蜜はダンジョンで手に入れることができる。シオの実は大森林はもちろんだけど、ダンジョンの下層でも採取できるみたいだから、食べていけるわよね、普通に）十五歳。この世界での成人年齢になれば、もう追われることもないだろうと、師匠であるミーシャが助言してくれたのだ。

成熟した人格として認められる成人年齢になれば、生家に縛られることはなくなるのだ、と。



（家財を持ち出して辺境伯家から逃げたのは、証拠不十分のはず。『アリア』は誰も傷付けてはいない。高価な魔道具は放出していないから、バレることはない……うん、きつと大丈夫）

唯一の気掛かりは、成長すること。『妖精姫』ともてはやされていた母に似てきたことだろうか。本邸にあった母の肖像画はすべて回収してあるし、バレないとは思うのだが――

「どうした、ナギ？」

ふ、と顔に影が掛かる。エドが心配そうな表情で覗き込んでいた。なんでもない、と微笑む。

「今日の新米をどうやって食べようかなって、考えていただけよ」

「そうか。俺は角煮丼がいいと思う」

「エドは本当に好きよね、角煮」

考えても仕方ない。今は新米を楽しむ方法をエドと語り合うことの方が、よほど大事だ。

「どうせなら、それぞれがお米に合う料理を持ち寄って、新米パーティをしてみない？」

「なんだ、それは。楽しそうだ」

「でしょう？ 心ゆくまでお米を味わっちゃおう！」

そう、美味しいご飯に心を弾ませているのが、自分たちらしい。

新米の季節は心が弾む。日本の米と遜色ない味のお米――しかも、その新米が手に入ったのだ。ナギはこの時期、冒険者ギルドに預けている資金から『ごはん代』として、かなりの金貨を引き出して、大量の新米を購入するようにしている。

「持っていて良かった【無限収納EX】スキル……！」

大量に購入しても劣化せず、いつでも美味しい新米を食べられるなんて幸せすぎる。

とはいえ、育ち盛り食べ盛りの少年少女が美味しく消費していれば、いずれ在庫も尽きるもの。

大抵は半年ほどで食べ尽くしていた。なので、二人が新米を口にするのはじつに半年ぶり。

「楽しみ過ぎる……！」

夕食は何にしようか、と浮き立つ心のままマイホームに帰宅した。

東と南の砦のちょうど真ん中あたりの土地を購入し、エドとの拠点にした地には、王国様式の瀟洒な屋敷が建っている。大森林で手に入れた果樹はこの庭に見事に根付き、豊かな実りを二人に与えてくれていた。新鮮な葉物野菜を食べたいと作った畑には、美味しい野菜が実っている。

「水蜜桃の苗木もちゃんと根付いて、嬉しいな。果実も収穫ができたし」

「去年は四個だけ実っていたな」

「そうね。私たちと師匠二人で、ひとつずつ食べて終わりだったね」

移植した大森林産の果樹は土が合ったのか、ナギの魔力をたっぷり浴びているのが良かったのか。すっかり我が家の庭に根付いて、毎年立派な果実を提供してくれている。

「林檎と柿と梨、たくさん収穫できて嬉しいわ」

「知り合いに配っても、まだたくさん余っていたな」

「それはうちで美味しく消費しちゃう。アップルパイもたくさん焼いておきたいわ」

柿と梨は水分がたっぷりで甘味も強いので、そのまま食べても美味しい。

もつとも、せっかくなのでいくつか覚えていた前世のレシピで柿料理には挑戦していた。

柿と大根のサラダ、柿プリン、柿羊羹ようかんにカプレーゼ。思い出して、うつとりする。

「モッツアレラチーズをサンドした柿のカプレーゼは美味おいしかったよね」

「ああ。トマトもチーズと相性は良かったが、まさか柿とチーズがあんなに合うとは思わなかった」  
特に女性受けがいいようで、師匠たちは柿のカプレーゼを肴さかなに、一晩中飲み明かしたらしい。

「梨はコンポートやゼリー向きだったね。美味おいしかった」

「俺は梨のチーズケーキが斬新だったと思う」

他愛ない会話を交わしながら、我が家へ足を踏み入れる。

交代で汗を流し、冒険者装備から部屋着へと着替えた。小花柄のカシユクルワンピースはお気に入りだ。上品なミモレ丈の薄青いワンピースに白い刺繍糸で花を咲かせている。

せっかくのワンピースを汚したくはないので、エプロンは忘れずに装備した。

エドがシャワーを浴びている間に、新米を仕掛けておこう。

ザルに入れて米をざつくりと洗っていく。土鍋にお米をセットして、三十分ほど浸水させている合間に、おかずになる料理を仕込んでおくことにした。

「焼き魚は絶対に食べたいよね。やっぱりサンマ？ サバは味噌煮が好きだけど……」

残念ながら、まだこの世界では味噌を見つけていないのだ。

鮎あゆの塩焼きも好物だが、ここでは海の魚しか手に入らないので、やはりサンマの塩焼き一択か。

七輪でじつくりと焼き上げたいので、そっちはお風呂上がりのエドに任せることにした。

白飯と言えば、生姜焼きだ。これは恐ろしくご飯がすすむメニューでもある。前世の我が家では白飯泥棒と呼ばれていた。

三食そぼろ丼も捨て難いが、今日は新米を楽しむための夕食。色々な種類のおかずを少しずつ摘んで楽しむのが目的なので、シンプルなそぼろオンリーでいこう。

魔道コンロをフルで使い、オーク肉を調理していく。そぼろは作り置き用にたくさん作ることにした。オムレツや炒飯、煮物に炒め物など、アレンジ料理に使えるので地味に便利なのだ。

「ナギ、サンマが焼けたぞ」

「お、いいところにエド。……あーん？」

「あー……ん？ んまい」

オーク肉の生姜焼きは彼の口に合ったようだ。エドから手渡されたサンマを皿ごと収納して、次はそぼろの味見をお願いする。こちらはスプーンですくって、ぱくり。

「少し甘めな味付けなのがいい。もつと食いたくなる」

「あと少しだけ我慢してね。エドは新米に合う料理、何を用意するの？」

「今から角煮を作るのは大変だから、シンプルにいくつもりだ」

時間があつたら、角煮を作る気だったのだろうか。エドの本気度が怖い。

一時間後、無事に新米が炊き上がった。『新米に合う料理』もそれぞれ準備できたようだ。

テーブルいっぱい料理皿を並べ、中央に土鍋を配置する。

新米特有のほのかに甘い香りが漂ってきて、期待に胸が震えた。

「エドが用意してくれたのは、サンマの塩焼きと生卵に海苔の佃煮？」

「卵かけご飯は正義だと思う」

「分かる。炊き立ての新米で卵かけご飯だなんて、最高の贅沢よね」

さすがエド。他のチョイスも渋いが、外れはない。温かいうちに食べることにした。

「卵と醤油だけのシンプルなTKGが美味しい……」

「ナギ、ナギ。醤油の代わりに海苔の佃煮で味変しても旨いぞ？」

「本当だ、海苔の香りがいいね。大葉もどきハーブとネギに味付け海苔を散らしてもいいと思う」

「オーク肉のそばろと生卵も合うと気付いてしまった。これは止まらない……！」

卵かけご飯だけで、何度もお代わりしてしまった。麦茶を飲んで、いったんリセット。

「サンマの塩焼きはシンプルでいいね。脂がたつぷりのついでに絶品！ 新米ご飯とお互いに引き立て合って、これ以上高みを目指してどうするのって思っちゃうくらい美味しい……」

「オーク肉の生姜焼き、これも文句なしに米と合う。茶碗じゃ足りないから、丼鉢で食おう」

生姜焼きをご飯にのせて、口の中に掻き込んで食べる様は何ともワイルドだ。

だけど、最高に美味しい食べ方だと思う。我が家だもの。マナーはいったん忘れよう。

エドの真似をして、ご飯に肉を載せて頬張った。ああ、ダメだ。たしかに、これは丼が必要。すごく美味しい。お腹をコレで満たしたくなるが、今日はとっておきのアレがあるのだ！

「イクラの醤油漬けもいこう、エド。薬味と一緒に食べれば、きつと最高よ」

「ん、試してみよう」

イクラは南の『海ダンジョン』で手に入れた。シーサハギンの宝箱に、稀に入っているらしい。

市場で見かけて、大喜びで購入した。醤油漬けにしておいたイクラなら、新米と合うはず。

ピカピカに輝く海の宝石をご飯ごとスプーンですくって口に入れる。噛み締めると、芳醇な海の香りが口いっぱいに広がった。磯の香りが脳を甘やかに支配していくようで、うっとりする。

「んん……！ 絶品！ すっごくおいしい！」

「珍味だな。だが、癖になる。これはサーモンの刺身と一緒に食っても美味いんじゃないか？」

「エド冴えているね？ それを日本では、鮭の親子丼と言います」

お互いに感想を口にしながらも、料理を口に運ぶスピードは衰えない。

夢中になって、新米とテーブルっぱいの料理をあつという間に完食した。

「土鍋で三合は炊いたつもりだけど、食べきっちゃったね。満足したー」

「ああ、旨かったな。さすが新米。大抵の料理に合うし、引き立ててくれるのがすごい」

新米をおかずに米が食える、と冗談を言ったのは誰だったかな。

それも納得だと思うくらいに、今年の新米の出来は素晴らしかったように思う。

「ミーシャさんたちにも新米のおにぎり、差し入れてあげようか」

「そうだな。あと、ドワーフ工房に土鍋開発の礼を伝えたい」

「いい考えね。私もミヤさんにお礼を言いたいわ。きつと、新米も気に入ってくれるはずよ」  
だって、美味しい食べ物は皆を笑顔にしてくれる力があるのだから。

東のダンジョンで、今ナギとエドが狩り場に行っているのは二十階層だ。

ダンジョンでは十階層からフロアボスが出没するようになる。

フロアボスとはその階層に出没する魔獣や魔物の上位種。ゲートキーパーとも呼ばれており、下層に降りる階段や転移扉の前に現れる強敵だった。

「十階層のゴブリンキングにはたくさん稼がせてもらったね」

「そうだな。その内、黄金の王冠も売り払いたいが」

「もうしばらく間を置かないと、さすがに怪しまれないかな？」

「不審に思われるか……」

「私たちなら、いつでも手に入れることができるアイテムだけだね」

ギルドには幸運値が高いからと誤魔化してはいるが、まさか倒した魔獣がドロップアイテムに変化する前に【無限収納EX】に回収するのでアイテムは総取りだなんて、言えるはずもなく。

「幸運値が高いのは本当のこと。嘘は言っていないわ」

「黙っているだけだから。たしかに嘘は言っていない」

なるべくなら嘘を吐きたくはないのだ。なので、二人は「黙っていること」を選んでいる。

特に怪しまれることも追及されることもなく、黙認されているのが現状だ。

それも二人が普段から真面目に活動をして、ギルドスタッフや古株の冒険者たちに可愛がられて

いるからだと思う。人に恵まれたのもあるが、それはナギたちがきちんと頑張ってきた成果でもある。

礼儀正しく過ごし、街中依頼も定期的になし、たまの差し入れも惜しまない。

素直に慕ってくれる後輩を、強面の冒険者たちが可愛いと思うのも必然。

それに二人が冒険者ギルドに登録したのは、まだ十歳の頃。小さくて頼りなかった二人が堅実に力をつけて、着実に依頼をこなしていく様を親心に近い目で見守ってくれた人たちは大勢いる。

訳ありなのだろうと理解して、彼らは踏み込みすぎない程度に手を貸してくれていた。

「東のギルドにはお世話になっているし、皆にはあんまり嘘を吐きたくないのよね」

「ナギ、おしゃべりしている暇はなさそうだな。ハイオークだ」

「はい。数が多いようだから、少し減らすね！」

この三年で、ナギも成長したのだ。師匠であるエルフのミーシャに教えを乞い、魔法の特訓を重ねて、魔法職の冒険者として腕を上げている。三年前は動かないのしか当てられなかったが、今では向かってくる魔物に向けて複数の攻撃魔法を放つこともできるようになったのだ。

「ウインドカッター、乱れ撃ち！」

ソーサラーオークの配下、ハイオークの五頭の首を風魔法で刈り取って、すぐに目視で死骸を収納する。ハイオークは弓や剣で武装したオークの上位種だが、ソーサラーオークは魔法を使うハイオークだ。厄介な相手だが、彼らの魔法の発動には詠唱が必要なため、倒す手段はある。

本来なら配下の五頭が詠唱のための時間稼ぎをするはずが、ナギが瞬殺したのだ。

ソーサラーオークが動揺し、詠唱が一瞬だけ止まった。

もうその瞬間にはエドが肉薄し、その首を片手剣で落としている。

「相変わらず、速い」

その動きはもうナギの目では追えない。

漆黒の風が過ぎつたと感じたのとほぼ同時に、フロアボスは地に倒されているのだ。

ドロップアイテムに変わる前に、ソーサラーオークの亡骸を【無限収納EX】内に回収する。

「火魔法を放つ杖と魔力回復の腕輪を装着していたみたいね。エド、欲しい？」

「使わないな」

「じゃあ、冒険者ギルドに買い取ってもらおう。魔石と魔道具二つ。オーク肉もたくさん手に入っ  
たから、売っちゃおうか。ハイオークのお肉は——……」

「それは食おう」

迷いのない眼差しで断言され、ナギはくすりと笑う。

最初からそのつもりだったので異存はない。笑顔で頷いておいた。

「今夜の夕食はハイオークカツにしようかな？」

「悪くないと思う」

「そこは、喜んで！　でしょ？」

クールを装っても、身体は正直だ。ふさふさの黒い尻尾が嬉しそうに揺れている。

オークカツはエドの好物だ。しかも今回は、上位種のハイオークを使ったカツ。

（そんなの美味<sup>おい</sup>しいに決まっているわ！）

きつとナギに尻尾があっても、エドと同じように揺れていたことだろう。

半日ほどダンジョンに潜っていたので、かなりの数のオークとハイオークを狩ることができた。

フロアボスも倒し、魔道具も二つ手に入れたし、一日の稼ぎとしては充分だ。

手を繋ぎ、ダンジョンの転移扉に触れる。帰還したいと念じれば、ダンジョンの入り口の隣にあ

る、もう一つの扉の前に転移できるのだ。このダイレクト帰還は十階層に到達しないと、使えない。

そのため、冒険者はまず十階層を目指してダンジョンに挑む。

エドに手を引かれながら、ダンジョンから外に出た。同じようにダンジョン帰りらしき冒険者た

ちがちらちらとこちらを見詰めてくるが、エドの一瞥でぱっと視線が逸<sup>そ</sup>らされた。

空はすっかり赤く染まっている。エドが手を引いてまで急ぐ理由がナギにも分かった。

「早くギルドに行かなきゃ、混雑しちゃうもんね」

「……………そうだな」

なんとも言えない表情でエドが顎を引く。最近よく見かける複雑そうな表情に、ナギは「んん？」と小首を傾げた。だが、エドは「なんでもない」としか言ってくれない。アキラに相談してみても、「思春期ですからね……」と気の毒そうに謎の発言をするだけなので、よく分からなかった。

（まあ、特に困ってはいなさそうだし、気にしないでおう）

ポジティブ思考な少女は繊細さとは程遠い性格をしており、人の感情に疎<sup>と</sup>いはずのエルフのミーシャにまで「ナギは、鈍感……？」と首を傾げられていた。

ドロップアイテムとオーク肉をギルドに買い取ってもらうと、かなりの金額になったので、二人



は弾むような足取りで市場を目指す。

目当ては、馴染みの肉屋だ。この店の加工肉が絶品なため、二人は常連になっている。

「こんにちは、おかみさん。オーク肉の加工をお願いしてもいいですか？」

肉屋で売り子をしているのは、この店の主の奥さんだ。恰幅が良く、いつも陽気に笑っている気持ちのいいご婦人である。

「いいよ。裏で旦那が肉を捌<sup>さば</sup>っているから、直接お願いしておいで。いい肉があるようなら、うちでも買い取るからね」

「ありがとう！」

ナギは笑顔で手を振り、店の裏口に向かう。エドも軽く一礼すると、ナギの後を追った。

この肉屋には、時折ダンジョンで狩った肉を直接卸<sup>おろ</sup>している。

大量に魔獣肉が手に入った際、さすがにすべてをギルドで買い取ってもらうわけにもいかず、在庫を抱えて途方に暮れていると、当時の買い取りカウンター担当のガルゴがこっそり教えてくれたのだ。ギルドを通さずに直接肉屋に売ればいい、と。ギルドを通すと、手数料と税金が引かれた金額になるが、肉屋と直接交渉をすれば、差し引かれることはないらしい。

『肉屋もギルドを通すより安く仕入れることができるし、冒険者も二割は高く買い取ってもらえるからな。どっちも得になる』

ギルドとしては微妙な話だが、暗黙の了解となっているようだ。もともと、毎回大量に魔獣肉の横流しをしている冒険者は目を付けられており、ギルドから指導が入るようだが。

『大量に狩った時に、まあ、ほんの少しだけ肉屋に回すくらいなら、誰も目くじらは立てねえよ』

ありがたい助言を得て、おすすめされた肉屋に向かったのだ。

その肉屋は卸<sup>おろ</sup>した肉をただ売るだけでなく、加工も請け負っていた。生肉の他にも、生ハムにベーコン、ソーセージなども取り扱っており、試しに食べてみたら、絶品だった。

自分たちで加工するより、断然こちらの方が美味<sup>おい</sup>しい。

なので、肉を持ち込んで加工してもらえよう、交渉した。

『ギルドでの買い取り額と同じ金額で肉を卸<sup>おろ</sup>すので、この肉を加工してください』

強面<sup>こわもて</sup>の肉屋のおじさんにナギは商談を持ち掛けた。差し引かれる二割ほどの金額をそのまま加工賃として請け負ってもらおうと考えたのだ。そんな依頼は初めてだ、とおじさんは大声で笑って快諾してくれた。それ以来、もう二年越しの付き合いなのだ。

「おじさん！ またお肉の加工をお願いしてもいい？」

「おう、ナギか。エドの坊主も元気そうだ。今日は何の肉を持ってきたんだ？」

「なんと、ハイオーク肉です！」

じゃーん、と偽装用のマジックバッグから取り出した肉を見て、おじさんも嬉しそうだ。

「劣化もしていない、いい肉だ。いつものように、一頭分まるまる預かればいいのか？」

「お願いします！ それと、これ。買い取りはオーク肉とハイオーク肉、どっちにします？」

にんまりと肉屋のおじさんが笑う。凶悪な笑顔だが、見慣れた二人にはとても頼もしい表情だ。

「もちろん両方買い取るぜ？ 状態のいいダンジョン産の肉は大歓迎だ！」

頼もしい商談相手に肉を手渡して、加工をお願いする。

自家製のハーブ類やニンニク、塩胡椒に砂糖などの調味料も袋に入れて渡しておいた。

「モモ肉は生ハムに。ロース部分もハムで食べたいです！ 肩の部位はシオルダーハムで！」

「おう、分かった。バラ肉はいつものようにベーコンにするんだな？」

「はい！ おじさんの作るベーコンは絶品なので。無くなったら、エドが泣いちゃう」

「……泣きはしないが、悲しくはなる」

「はははっ！ そりゃあ頑張って作らないとな！」

軟骨やホルモンは下処理を、タン部分はカットをお願いした。

「その他の肉でありったけのソーセージを作ってください」

ミンチ肉や切れ端肉、内臓や血を使うソーセージの種類は多彩だ。部位はもちろん、使う調味料やハーブの塩梅で、まったく違う味わいになるのが面白い。

「分かった。サラミはどうする？」

「食べたいです！」

ドライソーセージも味わい深くて大好きだ。お酒の肴にとても合うが、意外とおにぎりとの相性も悪くない。味が濃い肉を噛み締めると腹の底から力が湧いてくる、とはエドの談。

「二週間後に取りにきな」

「はい！ 楽しみね、エド」

「ああ、楽しみだ。おやっさんの作る加工肉がいちばん旨い」

「口が巧くなったな、坊主。ほら、これも持っていけ！」

「ありがとう」

投げ付けられた特製ジャーキーをすばやくキャッチするエド。ご機嫌な漆黒の尻尾と、どこか誇らしげな様子の店主を交互に眺めて、ナギは瞳を瞬かせた。

（うちの子がおじさんキラーになっている。いつの間にそんな技を覚えたの）

常連だけに提供されている、隠れ裏メニューのいちばん人気のジャーキーだ。めったに手に入れないそれを貰ったエドは大切に、マジックポーチにしまっている。

「成長したわね、エド……」

「？ ナギも食うか？」

「ううん、それはエドが食べるほうがいいと思う。……遅くなっちゃったね。早く帰ろう」

「今日はハイオークカツだしな」

「うん。ふふ。たくさん揚げようね」

カツをたくさん作った翌日のお弁当はカツサンド。揚げ立てサクサク食感のカツと白飯も美味しけれど、ソースが染み込んで、しっとりしたカツとパンと一緒に食べるのもまた格別なのだ。

「また狩りに行こう」

相変わらずエドは近所のコンビニに行くノリでダンジョンに誘ってくる。

もちろん、ナギの答えは決まっていた。

冒険者ギルド経由でハーフドワーフのミヤからの手紙を受け取り、二人はドワーフ工房へ向かった。いや、今はドワーフ工房ではなく、生活魔道具工房と呼ばれている作業所だ。

頼んでいた道具が完成したとの連絡だったので、弾むような足取りで向かう。

「何の道具だ？」

「依頼の品が完成したとしか書いていないの。たくさん頼んでいるから、どれか分からないわ」

キッチン用品をメインに、前世で使っていた便利な道具作りを気楽に頼みまくった結果の弊害だ。おそらくは口頭で提案した依頼の分も合わせると、十件以上は作成をお願いしているはず。

「行ってみたら分かるわ。何が完成したのか、楽しみね」

試食が楽しみなエドはアバウトなナギの発言も気にしていない。

以前は包丁やフライパン、鍋などの調理器具ばかりを作っていたミヤの工房は、今では魔道具職人であるハーフェルフのムーラと共同で様々な商品を作ってくれている。

「二人のおかげで魔道ミキサーや魔道泡立て器が完成したものね。本当に感謝しかないわ」

「ナギの無茶苦茶なりクレストでもちゃんと聞いてくれるのはすごいと思う」

「む、無茶苦茶じゃないもん……」

構造を完全に理解できていない道具も多いので、簡単なイラストと用途の説明をしただけの依頼も多い。ミヤとムーラは試行錯誤しつつも、きっちり作り上げてくれるのだから、天才だと思う。

ちなみに、これまでに作った調理器具諸々の特許料としてミヤから貰ったお金を開発費用に充てている。今のところは赤字がないので、気兼ねなく新規の依頼を投げまくっているのが現状だ。

「二人が作った『生活魔道具工房』の運営も順調で嬉しいわ」

「ナギが提案した調理器具類が爆売れしているからな」

おかげで、ダンジョン都市の飲食業界隈は大盛況だとか。

高額な魔道具には前世の料理レシピを添えて販売しているので、最近は外食が楽しみになった。生活魔道具工房に到着すると、さっそく工房主であるミヤが出迎えてくれた。

「完成したよ、これ。すっごく面倒だったんだからね！」

赤毛のポニーテールを揺らしながら、完成品を手渡してくれる。

「ありがとう、ミヤさん！」

完成したのは、随分と前に依頼していたホットプレートだった。卓上サイズの魔道具仕様で、プレート部分が着脱式になっている。わくわくしながら、蓋を外してプレートを確認した。

「プレートは二枚あるのか？」

「うん、普通の鉄板焼き用のと、たこ焼き用と二種類！」

「たこ焼き……！」

ぱつとエドの表情が明るくなった。珍しく笑顔のエドに、不思議そうなミヤ。

「アタシは依頼があったから、その通りに作ったんだけど。こっちのプレートの使い方が分からないんだよね。これ、どうやって使うつもりなんだい？」

工房奥からミヤの相棒、ハーフエルフのムーラも顔を出してきた。魔道具部分の製作は彼が担当しているので、気になったのだろう。半分エルフの彼は、半分ドワーフの彼女と仲がいい。

「じゃあ、厨房を少しお借りしてもいいですか？ たこ焼きをご馳走しちゃいます！」  
ナギの提案に職人二人と、なぜかエドまで笑顔で頷いた。

事前に二人には食の禁忌や苦手な食材はないかを確認してある。異世界初の、たこ焼きパーティーだ。ちょうど三日前に海ダンジョンに潜ったところなので、タコの在庫には困らない。

エドを助手にして、たこ焼き用の具材を用意することにした。

「とっても簡単なのよ。生地と中に入れる食材さえあれば、すぐに作れるから」

タコを切るのはエドに任せて、ナギは生地を作ることにした。小麦粉と水、ミルクに卵を割り入れて混ぜていく。生地にはしっかりと出汁をきかせておいた。

「具材はタコだけでいいのか？」

「うーん、今日はキャベツと天かすにしようか。ネギも少々。紅生姜はさすがに無いね、残念」

天かすは天ぷらを揚げた際にできた物をしっかりと確保してある。

うどんや蕎麦、スープやおにぎりにちよい足しすると美味しいので、意外と重宝していた。

ミヤとムーラが興味津々で見つめてくる中、工房内でたこ焼きパーティーは始まった。

テーブルの中央に魔道ホットプレート置き、たこ焼きを作っていく。丁寧に油を塗り込んだプレートに温めて、生地を少しずつ流し込み、具材を一個ずつ放り込んでいくのだ。

刻んだタコと天かす。みじん切りにしたキャベツとネギ。蓋をするように、生地を上から流し込

んだら、あとは火が通るのを待つだけだ。ぷつぷつと生地に火が通る音が弾けている。

「へえ……面白いね。自分で調理して、そのまま食べる料理か」

「熱々だから、美味しいんですよ。自分たちで焼くのも楽しいし」

「そういうものなのですか」

ハーフエルフのムーラは不思議そうだ。自炊は基本的にしないらしい。

「あ、もういいかな？」

あふれた生地が固まりだしたら、竹串でひっくり返していく。前世の渚は、週末によく友人たちと自宅タコパを楽しんでいた。ナギは手慣れた様子で、火が通ったたこ焼きを転がしていく。

おお、と三人から歓声が上がる。手早く竹串を動かして、丸い形を作っていく様が面白かったようだ。綺麗な焼き色がついたところで、たこ焼きを皿に盛ってみた。

「ソースと青のり、鰹節は必須よね。マヨネーズはお好みで。はい、どうぞ！」

「ありがとう、ナギ。美味しそうだ」

「あの……、これ生きていませんか？ うねうね動いているのですが」

「ムーラさん、それは鰹節。大丈夫、生き物じゃない」

怖がりのハーフエルフの青年を、エドが宥めている。そういえば、前世でも海外の観光客がたこ焼きやお好み焼きの鰹節に恐れ慄いていたことを、なんとなく思い出した。

「あつっ！ 熱いけど、美味しいね、コレ！」

「ええ。どんな味がする料理か、まったく想像が付きませんでした、とても美味です」

ミヤとムーラに絶賛されて、ナギだけでなく、エドもなんだか嬉しそうだ。皆でわいわいとたこ焼きをつまむ中、ナギは再び、生地をプレートに流し込んでいく。

気付いたエドが交代を申し出てくれた。

「ナギ、次は俺がやる」

「いいの？」

「ああ。やってみたい」

好奇心いっぱい目の眼差しで訴えられたら、任せるしかない。

お言葉に甘えて、焼き担当は彼に任せることにした。フォークを刺して、たこ焼きを口に放り込む。出汁の利いた生地とぶりのタコの食感に口元を緩めた。たこ焼きだ！

「ん、美味しい！ちゃんと、たこ焼きの味に仕上がっているわ」

異世界の食材や調味料だけで再現したので、少しだけ不安だったのだ。

「以前にフライパンでたこ焼きを作ったことがあったけど、コレジャナイ感がすごかったのよね。やっぱり、たこ焼きはこの丸く愛らしいフォルムが大事だったのよ。リベンジができて嬉しい」

フライパンで平らに焼いたものもはや、お好み焼きでしかないのだ。

「なるほど。なんで、こんな妙な形のプレートを作らないといけないのかと不思議だったけど、納得だね。このタコヤキとかいう料理、最高じゃないか」

「ふふふ。美味しいし、簡単に作れて素敵でしょう？ しかも、このプレート、たこ焼き以外にも使えちゃうんですよ。アヒージョも作れるし、なんと、スイーツも作れます！」

甘くした生地を入れて、一口サイズの焼き菓子を作るのもお約束である。

「プレートを入れ替えたら、肉や野菜を炒めることができるので、おうちパーティにも大活躍しますよ、ホットプレート」

調理が面倒な時に具材だけ用意しておけば、セルフで楽しめるのも嬉しい。

「これなら、自炊が苦手な私でも調理ができそうですね」

感心したように、タコ焼きを咀嚼するムーラ。くはは、とミヤが豪快に笑う。

「アンタは甘党だから、菓子作りの方が気になっているんだろ？」

「否定はしません。オーブンを使うのは火加減が難しいので諦めましたが、これなら私でも美味しい焼き菓子を作ることができそうです」

かくして魔道ホットプレート（たこ焼きプレート付き）はその後、ダンジョン都市で販売されて、爆発的に流行した。普段、料理をしない冒険者たちはもちろん、一般家庭にも売れたらしい。

ちなみにアキラは自分でたこ焼きが焼けずに落ち込んでいたが、たこ焼きはすっかり堪能した。野営時に鉄板焼きも楽しめるようになったので、ナギ的には大満足の結果になった。

\* \* \*

「明日の休み、ナギは何か予定があるのか？」

夕食後、たこ焼きホットプレートを使い、ベビーカーステラを作ろうとしていたナギは唐突なエド



の問い掛けに首を傾げた。

「午前中に料理の作り置きをするくらいかな？ ああ、市場や商店街に買い物には行きたいかも」  
特に予定もなかったので、そう答えると、そうか、とエドが顎を引く。

「なら、その買い物にアキラと一緒に行ってくれないか？」

「え？ アキラと？」

「ああ。たまには街中を散歩してみたい、とアキラがうるさくてな」

「あー……」

なんとなく、想像はつく。せっかく異世界に転生したのだから、ファンタジーな街並みを観光したい、なんてエドに泣きついたに違いない。

軍馬並みに巨大な黒狼を引き連れて街を闊歩するわけにもいかないので、これまでアキラと出掛けたことはなかったが、我慢も限界なのだろう。エドの目から世界を見ることはできるけれど、テレビのモニター越しに見つめている感覚なのだと、以前にアキラから聞いたことがある。

（それはすごく、寂しいよね）

念願のファンタジーな街並みを実際に見て、体感したい気持ちはナギにも理解できる。

出掛けるとしても仔狼の姿にはなるのだが、ダンジョン都市の賑わいを直接その身で体感できるのなら、アキラも文句は言わないだろう。

「私は構わないけれど。エドがそう言うてことは、ようやく認めてくれたのかな？」

「む……」

ちよつと意地悪な言い方になってしまったか。ナギはエドの脇腹を肘で突いた。

「だって、ちよつと前までのエドは私一人での外出も許してくれなかったじゃない？ いつもボデイガードよろしく、どこでも同伴だったもの」

アキラが仔狼姿でガードするから、と。どんなに訴えても、自分が守ると決して譲らなかった、あのエドが！ 肉体の所有権を渡して、ボデイガード役を仔狼に譲ろうとしているのだ。

「やっとながが自衛できるくらいには強くなったって、認めてくれたってことでしょう？」

「……ナギが強くなったのは、ちゃんと認めている。それにアキラも頼りになる奴だ」

認めてはくれたが、複雑そうな表情をしている。面白くなさそうな、ちよつと拗ねた顔？

出逢ってからずっと、彼は騎士よろしく、ナギの身を守ってくれていた。

「魔法の腕も上がったし、これでも銅級の有望な冒険者。何かあったら、すぐに【無限収納EX】スキルの小部屋に逃げ込むつもりだから、心配しなくてもいいのよ？」

だいたい、エドは心配性なのだ。ダンジョン都市は冒険者以外の住民も半数ほど占めている。

問題を起こした冒険者はすぐに通報され、罰則が与えられるので、意外と治安は悪くない。市場や商店街だって、手癖の悪いスリにさえ気を付ければ、特に危険な場所ではないのだ。

貴重品はしっかり【無限収納EX】に収納してあるので、盗まれる心配も不要。

「アキラもちゃんと番犬？ ……えーと、護衛犬？ してくれるだろうし」

なんで疑問形？ と、後でアキラには叱られそうだが、仔狼姿の彼の見た目は、どう見てもポメラニアンな愛玩犬なので。

「三年間ずっと我慢してくれたんだし、ご褒美に街に連れて行ってあげるわ」

「……そうだな。アキラはずっと街や冒険者ギルドに行ってみたいと言っていた」

「危ない場所には絶対に近寄らないって約束する」

「それは当然のことだな」

ダンジョン都市にもそれなりに危険な場所はある。

師匠たちやサブマスターになったフェローにも何度か口頭で念押しされた、裏通り。スラム街ではないようだが、後ろ暗い連中が多く住み、表通りには出せない店や屋台が並んでいるという。

興味がないとは言わないが、わざわざ自分から危険な場所に赴く酔狂さはないので、もちろん行くことはない。

何せ、二人のモットーは『命大事に、美味しく楽しく快適なスロライフ！』なのだから。

「じゃあ、お揃いのリボンをして行かなくちゃね！」

「……リボン？」

「うん。ギルドの受付嬢のリアさんが、街に妖魔を入れるなら、魔獣と区別するために首輪や足輪、リボンを装着させる義務があるって教えてくれたの。首輪を嵌めるのは嫌だろうし、なら、リボンだったらいいかなと思って」

「あー……どうだろう。リボンよりは首輪がマシと、アキラなら言いそうだが……」

「でも、リボンだったらお揃いにできるのよ？」

「……………そうか。アキラなら喜ぶ、かもしれないな」

そつとエドが視線を逸らした。

「……ところで、ナギ。それは何を作っている？」

あからさまな話題逸らしだが、気になってはいたのだろう。

たこ焼き器で忙しく生地を焼くナギの手元を、エドがじっと見つめてくる。

「ベビーカーステラよ。オヤツにどうかと思って、試しに作っているの。食べてみる？」

「ベビーカーステラ……。味の想像が付かないから、食べてみたい」

「んー？ アキラの記憶にはないのかな」

たこ焼き器で作るベビーカーステラはとても簡単だ。レシピもシンプル。小麦粉と卵と砂糖、牛乳に蜂蜜に植物油を混ぜた生地を焼くだけなのだ。

たこ焼きと同じように竹串を使って転がして生地を丸めて焼き上げると、完成！

「熱いから気を付けてね」

「ん、……小さなパンケーキ？」

「昔ながらのホットケーキ生地に近いかな？ でも、素朴で美味しいのよ。たまに食べたくなる」

「そうだな。卵の味が濃いのが嬉しい。パンケーキより簡単で、たくさん作れるのがいい」

「でしょ？ 蜂蜜味のプレーンと、粉糖をまぶしたのとか、ベリージャムを詰めて焼いたのも美味しそうだから作っちゃおうかな」

たこ焼きと同じで、色々なアレンジが楽しめるのが、焼き菓子の面白いところだ。焼き上げたベビーカーステラにジャムを付けて食べるのも良し、バニラアイスとの相性も悪くないと思う。

「材料はたくさんあるし、師匠たちやギルドへの差し入れ用にたくさん焼いておこう」  
「俺も手伝う」

すっかり、竹串でひっくり返す作業にハマったエドはベビーカーステラ職人になった。その間にナギはベリー系のジャムを用意する。一口サイズで食べやすい菓子はダンジョンアタック中のオヤツはもちろん、事務仕事で忙しいギルド職員の口にも合うはずだ。

大量に焼き上げたベビーカーステラはいくつかのミニバスケットに放り込んでおく。これは差し入れ用。プレーンな味のカステラと、ベリージャム味の二種類が詰めてある。

焼き立ての菓子は温かいうちに【無限収納EX】に収納しておく。

アキラは冒険者ギルドにも興味があるようなので、立ち寄りついでに職員の皆にバスケットごと差し入れることにした。

「いい天気！ お散歩日和ね」

軽い足取りで街を闊歩するナギの前を颯爽と歩くのは仔狼だ。艶を帯びた真っ黒の毛並みが美しい仔狼は、鉄級以下の冒険者や街の人たちの目には、可愛らしい子犬にしか見えない。

さすがに銅級以上になると、彼がただの愛らしいポメラニアンもどきだとは思わないだろうが、（ブラックウルフの子供だと聡い人にはバレちゃうかな？ でもまあ、従魔だし、問題ないよね）だってこんなに可愛いのだ。胸元のふさふさの毛は微かに銀色を帯びており、とても美しい。

自慢の毛並みを風に靡かせて胸を張って歩く仔狼の愛らしさは、すれ違った人々の胸をキュン



キユンさせていく。その首にはシフォンジョーゼットに似た生地の水色のリボンが結ばれていた。特別なシルクで織られたリボンは透け感があり、重ねて結ぶとまるで妖精の翅<sup>はね</sup>のように美しい。同じリボンをナギも自慢の髪に結んでいる。両サイドをハーフアップにして、エドに整えて貰ったのだ。

ちなみに、本日のナギの服装はリボンと同色の水色のワンピースに白のフリルエプロン姿。半袖部分はパフスリーブで、スカートの長さは膝丈でふわりと広がっている。

白のレースのアンダースコートがちらりと覗く、愛らしいデザインだ。

そう、目にした仔狼<sup>アキラ</sup>が、少し呆れた視線を寄越してくるほどの、コスプレ風衣装である。

(一度着てみたかったのよね、アリス服。せっかく金髪碧眼美少女に転生したんだもの！)

仕立屋にイラストを見せて説明して、わざわざ作ってもらったお気に入りのワンピースなのだ。

普段、冒険者としてダンジョンに潜る際には背中半ばまでの長髪は邪魔になるので、ポニーテールにしている。

たまの休日くらいは、ナチュラルに下ろして女子を楽しみたい。冒険者装備には地味にお金を掛けているので、見栄えは悪くないが、たまには可愛い服でいたいのが乙女心というもの。

『あんまり可愛くし過ぎたら、ボディガードが大変になるんですからねっ！』

ぷりぷりと可愛らしくお尻を揺らしながら歩く仔狼が、何やら小声で愚痴っている。

久々のお出掛けに浮かれるナギはそれを聞き流し、通りの雑貨屋に視線を向けていた。

『センプイ、そのお店に入りたいんです？』

気付いた仔狼が、足を止める。こういったところは、エドよりも気がきくのだ。

「あ、ごめんね。気になるアクセサリーを見付けちゃって」

『じゃあ、入りますよう！ 俺も見たいです。異世界の雑貨屋』

「う、うん。いいのかな、ワンコも」

『ワンコじゃないです！ 俺は誇り高いブラックフェ……、んんっ』

「ん？ なぁに？」

『……なんでもないです。俺は可愛いワンコ……センプイ、俺を抱っこしてください』

しおらしく前脚を差し出す仔狼を抱っこして、雑貨屋のドアを開けた。中には入らずに、店の入り口でカウンタに座る男性の店員に「従魔もいっしょに入っていいですか？」と聞いてみる。

「小さくて可愛い子だね。中で暴れないなら問題ないよ。おとなしくしててね」

「ありがとうございます！」

おっとりとした店員さんは笑顔で受け入れてくれた。ナギも笑顔を浮かべてお礼を言う。アキラも小さくキャンと鳴いて感謝を伝えてみる。彼の笑みが深まったので、きつと伝わったのだろう。

その雑貨屋は女性用のアクセサリーやリボン、櫛<sup>くし</sup>などがメイン商品のお店だった。

ナギが気になったのは、銀細工の簪<sup>かんざし</sup>風のヘアアクセだ。

花の形の飾りが付いており、花びら部分に小さな青い石が嵌<sup>は</sup>まっている。

『綺麗ですね。センプイの目と同じ色だ』

「うん、どうかな。家でくらしいしか使わないだろうけれど」

『いいと思います！ この世界にも簪があるんですねー』

「ちよつと珍しいよね。こっちの世界、私たち以外にも転生者がいたりして？」

『まさかそんなー……まさか？』

「いやいや冗談……なんだけど……」

思わず顔を見合わせてしまう。まさかね。まさかですよ。

魔道具のトイレとか冷蔵庫とか冷凍庫が脳裏を過ぎるが、偶然だろうと無理やり納得する。雑貨店では銀細工の簪と仔狼用にこちらも銀のチェーンネックレスを買った。

ペンダントトップが親指ほどの大きさの琥珀で、一目で気に入った。エドの瞳の色だ。次にお出掛けする時はリボンの代わりに、このネックレスを付けてあげよう。

「首輪より断然いいと思う」

大森林でエドを拾った時に、首に嵌められていた隷属の首輪への嫌悪感はまだしつこくナギに残っている。あれはトラウマものだった。

エドにもアキラにも——たとえ狼の姿の彼らでも、首輪を嵌める気はさらさらない。

『俺はどっちでもいいですけどね？ リボン姿でもキュートだし！』

誇らしげに上げられた顎を指先で撫でてやると、きゅううと声が出るところがじつにキュートだとナギも頷いた。

雑貨屋を後にして、次に向かうのは馴染みの宿『妖精の止まり木』だ。

宿ではナギの魔法の師匠、エルフのミーシャがカウンターで暇そうに本を開いていた。

仔狼と連れ立ってお邪魔すると、なんとも言えない表情で黒い小さな狼を見下ろしている。

「……ナギ、それは何でしょうか？」

「あ、えっと。私の従魔のアキラです。可愛くてとってもいい子なんですよ？」

「そう……従魔……。それが……」

なぜ、遠い目に？ どこか諦めたような、穏やかな眼差しがとても気になったが、とりあえず差し入れ用に作ってきたベビーカーステラを渡すことにした。

「こっちのバスケットはミーシャさんに。これはラヴィさんに渡してください」

「今夜帰ってくる予定なので、預かります。とても魅力的な香りがしますね」

「ベビーカーステラっていう焼き菓子です。蜂蜜味で食べやすいですよ」

「ありがとうございます。楽しみです」

白銀色の美しい髪をさらりと揺らしながら微笑むエルフの麗人は相変わらず、夢のように美しい。生エルフを拝めて仔狼は猛烈に感動しているらしく、尻尾がビュンビュン回転していた。

「じゃあ、また遊びにきますね。ラヴィさんにもよろしくお伝えください」

「ええ。……くれぐれも、その子と仲良く」

「？ はい、もちろん！ 仲良しですから、私たち！」

なにせ前世からの腐れ縁。心配性の魔法の師匠に手を振って、次に向かうのは冒険者ギルドだ。大量に作ったベビーカーステラを差し入れついでに、アキラが掲示板を見たいらしい。



「そんなに面白い依頼はないと思うけど」

『だって、冒険者ギルドの掲示板ですよ？ 冒険の始まり、最初は薬草採取から。巻き込まれるゴブリン退治。これぞ、ファンタジー世界の、お約束ロマン……！』

「まあ、いいけど。遅くなるし、今日はお休みだから、依頼は受けないよ？」

『せめてスライム狩り……』

「だーめ。やりたかったら、また今度。ちゃんとエドにお願いして、OKをもらってからね？」  
愛らしい黒ボメにきゅううんと哀しそうに鳴かれると弱い、今日の予定はお散歩なのだ。

「さ、行こう。お楽しみの冒険者ギルドに」

木製のスイングドアを目にした仔狼はぼつと顔を輝かせた。

冒険者ギルドにアキラと一緒に来たのは初めてだ。

大柄な冒険者たちにうっかり蹴飛ばされないように、そつと抱き上げる。不本意そうな表情をしているが、それよりも冒険者ギルドへの興味が勝つたらしい。

仔狼は大人しく腕の中に収まり、キョロキョロと室内を観察している。

緊迫感のない、のんびりとした空気だ。

ちようどギルドでも出入りが少なくなる時間帯で、受付カウンターも空いている。

冒険者も数人ほどが待ち合わせをしていたり、併設している飲食スペースでエールを飲んでいるくらいで、殺伐さとは無縁な空間だ。

「ちようどリアさんがカウンターにいるね。差し入れを渡しちゃおう！」

馴染みの受付嬢の姿に気付いたナギが笑顔でカウンターに歩み寄る。

「リアさん、こんにちは」

「はい、こんにちは。ナギさん、今日はお一人……じゃなくて、可愛いワンちゃんと一緒なんですネ？ エドさんがいないなんて、珍しい」

「あ、ええと。エドは家でお留守番中です。この子は従魔のアキラついています。従魔というか、もう家族みたいな存在なんですけど」

「キャン！」

「ふふっ。ちゃんとご挨拶ができて、賢い子ですね。ナギさんも今日はお洒落をして、お出掛けでしたか？ とても可愛らしいです」

「ありがとうございます」

犬獣人のリアが仔狼を見てどんな反応をするか心配だったが、大丈夫そうだ。

笑顔でお礼を言うと、【無限収納EX】からバスケットを取り出して、リアに手渡した。中身はミィシャに託したものと同じ、ベビーカーステラだ。食べやすいよう、一個ずつ紙に包みである。

「新作の焼き菓子です。ギルドへの差し入れなので、皆さんでどうぞ」

「わあ！ ナギさんの新作ですか。それは楽しみです！ お茶休憩の時間に頂きますね」

ベビーカーステラには粉砂糖をほんの少しまぶしてあるので、疲れた身にはちょうどいい。

「甘く仕上げてあるので、ギルド名物の濃いお茶にも合うと思います」

「あはは……。あはは、職員の眠気覚まし用にわざと濃く淹れてあるんですよ」

初めて飲んだ時には、ナギもエドも涙目になって、そつとミルクと蜂蜜を足したほどだった。

「それはそうと、その子の従魔登録はもう済んでいるのかしら？」

「あ、まだです。……えっと、やっぱり登録はしておいたほうがいいんでしょうか」

「強制ではないわ。愛玩用や、商家や農家が仕事を手伝わせるために飼っている魔獣もいるし。でも、ナギさんは冒険者。そのうち、この子もダンジョンに連れて行くのでしょうか？ それなら、今のうちに登録しておいた方がいいわ」

従魔専用のタグがあるらしく、それがないとダンジョンに連れて行けないらしい。どうしようかなど悩むナギに仔狼がキュンキュンと甘えたように鳴きながら、額を押し付けてくる。

『センパイ！ 俺も冒険者ギルドのタグが欲しいですっ！ 堂々とダンジョンに入りたい！』

ぴすぴすと哀れっぽく鼻を鳴らされて、「毎回お留守番をさせるのは可哀想ですよ？」とのリアの一言で、心を決めた。

「従魔登録、お願いします」

「はい、承ります。登録料は銀貨一枚です」

にっこりと笑った受付嬢に、ナギは銀貨を差し出した。

『これが冒険者ギルドのタグ……！ センパイのと、同じ色だ！』

「タイムした冒険者のランクに準じるみたい。これで一緒にダンジョンに潜れるね」

雑貨屋で買った琥珀のネックレスに東の冒険者ギルド所属の従魔タグを通し、アキラはご機嫌で街を歩いている。胸を張って、小さな脚でてちてちと進む彼の姿はとても可愛らしい。

ほんのり銀を帯びたふかふかの毛皮の隙間から、ネックレスがちらりと覗く。ナギもエドも冒険者ギルドでタグを貰った時には、とても嬉しくて誇らしかったので、気持ちはよく分かる。

『そういえば、センパイ。書類には俺の能力のことも書いたんですか？』

「うん。簡単な内容だね。名前と、種族はブラックウルフ（幼体）って書いておいたよ。スキルは【身体強化】で、【氷魔法】が使えることも」

『……なんで、それであつさり通ったんだろう……』

仔狼が短い前脚で頭を抱えて低く唸っている。とても愛らしい。

ここにスマホがあれば写真を撮ったのに、と少し残念に思う。

「従魔の中にはスキルや魔法持ちは結構いるみたいだから、リアさんも特に不思議には思わなかったんじゃないかな。レアな【氷魔法】には驚いていたけど」

『……まあ、もうひとつの魔法がバレなかったのなら、べつにいいんですけどー』

三年間、ひっそりと家の前の森や人気のないダンジョンフロアでレベル上げを頑張ったアキラは、なんと【闇魔法】を修得していた。

これがかなり使える魔法で、魔物を眠らせ、暗闇に閉じ込めることができるのだ。最近はナギの影に潜み気配を消して隠れる魔法を覚えた。影から護衛できると、アキラは大喜びだった。

「闇魔法はさすがに隠すわよ。光魔法と違って、縁起が悪いとか気味が悪いって言われることもあるみたいだし。でも、睡眠魔法とか、すごく便利だと思うんだけどな」

今のところ自分には必要ないけれど、不眠症の人にはありがたい魔法だと思う。

薬に頼るよりも体に影響がなく、依存性もないのだ。夢も見ずに、ずとんと熟睡できるので、疲れも取れて爽やかな目覚めが堪能できると、自身で試してみたエドのお墨付き。

「お互いのスキルや魔法が共有できるのって羨ましい」

『まあ、そうかも？ オオカミなのに格闘技スキル使えちゃうし。蹴りはともかくパンチって！』しゅっ、と繰り出された前脚がもふっとナギのふくらはぎに当たる。

うん、ふわふわの毛ともちもちの肉球の感触だ。ありがとうございます。

「ボメラニアンばんち……」

『我、泣く子も黙る黒狼王ですよ？』

「うちの子、可愛すぎないかな」

ぽふぽふと優しくばんちを繰り返すも、ナギの目にはお手とおかわりを頑張って披露する愛犬にしか見えない。

でれっと相好を崩して、いそいそと【無限収納EX】<sup>インベントリ</sup>からボア肉ジャーキーを取り出して、可愛らしく拗ねた仔狼に捧げる。

『特製ジャーキー！』

キャン、と可愛らしい声でお礼を言っ、あぐあぐとジャーキーを齧る姿に通りがかりの街の人

もほっこりと微笑んでいる。  
『センパイ！ 今日の夕食はテイクアウトにしましょう。お留守番のエドの分もたっぷりと！』  
ギルド内でしつかり聞き耳を立てて、冒険者に人気の店の情報を集めていたらしい。

『情報収集は冒険者の基本ですからね！』

エールを飲んでいた冒険者やギルド職員、受付嬢がこっそりお喋りしていた内容をアキラは無害な愛らしい仔狼を装いながら、ちゃんと聞き取っていたのだ。

リアは気付いていなかったが、高レベルの元冒険者の職員が「あれは特殊個体では？ オーラが違う」などと、ひそひそ会話をしていたのもアキラは知っている。

サブマスのフェローがちりとナギとアキラを一瞥し、「あの子たちなら大丈夫でしょう」と流してくれたことも、きちんと把握しているのだ。

センパイは愛されているなあ、とアキラはしみじみ感心した。

（うん。センパイが言っていたように、東の冒険者ギルドは居心地がいいね）

実際にこの目で見て、悪意を持つ相手もギルドにはいないと確信が持てたし、これで心配性のエドも安心してくれるだろう。

「おいで、アキラ。おすすめの屋台に行こう」

のんびりと微笑む少女の腕にぴよんと飛びついて、アキラは「キャン！」といい子の返事をしておいた。